

「日本研究再考 – グローバルな文脈から –」

司会：安井真奈美（国際日本文化研究センター・教授）

パネリスト

アルノ・ナンタ（Arnaud NANTA）氏

フランス国立科学研究センター（CNRS）・研究指導官

発表タイトル「植民地台湾と朝鮮における人文科学の歴史：多角的な歴史検討の必要性」

20世紀末から加速化したグローバリゼーションより遙か前に、近世以降、欧州諸国がリードした植民地主義による第一次グローバリゼーションが起こった。19世紀後半から第一次世界大戦以降まで、国民国家と経済ブロックの形成が行なわれた「帝国の時代」には、近代的な大学制度や学問が形成され被支配地においても応用された。帝国主義というグローバリゼーションと、均等的な関係に基づく（筈の）現在の国際秩序は性質を異にするのだが、しかし自己／他者を対峙させた近代的なエピステーメと近代的な国民アイデンティティの形成過程を捉える上では、「帝国の時代」の人文科学史と脱植民地以降のエピステーメの間の連続性／関連性を再考する必要がある。本発表では、帝国日本が台湾と朝鮮を植民地支配することによっていかに自己の「国史」を強化して台湾と朝鮮（韓国）の歴史認識をつくったかを考察しながら、日韓台を繋げた体系的な歴史学検討の必要性について議論したい。

玉野井 麻利子 氏

カリフォルニア大学ロサンゼルス校・教授

発表タイトル「立ち位置ということ、あるいはグローバリゼーションをアメリカと日本で考える」

(President) Trump の時代に入ったアメリカでは、「正直」である人が裁かれ、「真実」を作り上げる人がまかり通るようになった。それも tweet という手段で。この tweet に書かれた、たった2、3行の「真実」は「グローバル」に、つまり世界中の、どこにいるかも、誰もわからない何万何千という人々に読まれ、解釈される。これから100年後、こうした2、3行の「真実」が「歴史文書」として扱われるとしたら…それを考えると背筋が寒くなるとともに、私たち歴史研究に携わるものの責任ということ新たに考えさせられる。

李成市先生は基調講演で「国際」という言葉が使われる。「グローバル」と違い、「国際」という言葉は geographical reference、つまり特定の地域、国、都市、町、

村、さらには人がどこにいるか、を指すことができる。つまり、人と場所が「見えてくる」。今も「国民国家」からなる地球に住む我々にとって、これはとても大事なことでないだろうか。

私の発表では、この二つの交錯する空間のなかで、また歴史人類学と東アジア研究にかかわる者として、「真実」という概念を再考してみたい。

ラスティン・ゲイツ (Rustin GATES) 氏

ブラッドリー大学・准教授

発表タイトル「日本研究のダイナミズムを維持すること」

私が米国で日本外交史専攻の大学院生として教育を受け、また研究・教育活動を行ってきたことは、日本研究に対する私のアプローチを規定してきた。米国の研究機関における日本史専攻の大学院生は、アメリカ史やヨーロッパ史を専攻する院生に比べてはるかに少ない。大学では、日本研究者がひとりだけということは珍しくないし、その人が学部のアジア研究を代表するということが起こりうる。

この現実には、日本研究者がより広い視野を持つ必要があることを意味している。すなわち、広範な分野の研究蓄積に目を通すとともに、「日本」を越えたさまざまな方法論や調査に親しまなければならない。しかしこれは、日本の外で日本研究を行う者の強みだと思う。広い視野を持つ必要性は、第一に、大きな問いを意識すること、第二に、分野・領域を横断することを不可避とする。大学の同僚や経営側に日本研究の価値を理解してもらうためには、われわれはグローバルな文脈で、あるいは比較の観点から重要な意味をもつ根源的な問題を考察しなければならない。今日、どの学問分野においても、研究はより狭く、より専門的になりがちであるが、「大きな問い」を考えるアプローチ ("large question" approach) によって、日本研究はわかりやすく、また人文社会科学の諸分野と関連づけられることが可能となった。さらに、複雑な問題に取り組むために、日本研究者は各自の専門分野の境界を越え、領域横断的に共同研究を行うことに対して積極的になる。こうした要素が、日本から海を隔てて遠く離れた米国の日本研究コミュニティの活力を保ってきたのではないだろうか。